となりの猫

mikatuki98

（１）

　梅雨の晴れ間、朝寝坊な菜亜子（なあこ）が三日分溜め込んだ洗濯物をやっと全部干し終えたのは、お昼に近い十一時頃だった。
　朝ご飯抜き、と言うよりも、朝昼一緒な感じなので、お腹が減っているから食事をせよ！　という脳からの指令も、近頃めっきり減っている。その代わり時々胃がキリキリと痛んで、胃の中に何も入れられていないことを意識させられる。それが今日は何だか無性にトーストが食べたくなった。そう、ロールパンじゃなくて食パンを焼いたもの。
　大き目の洗濯カゴをヨイショとお婆ちゃんのような掛け声を出して持ち上げた菜亜子の頭の中は、既にこんがりとキツネ色に焼きあがったトーストにバターが塗られ、小瓶に半分だけ残っていたブルーベリージャムを載せようとしている自分の手元が映像化されている。
「飲み物は……やっぱりインスタントコーヒーかな」
　菜亜子はコーヒー嫌いではないが、挽きたての美味さを抽出したような、通が好むあの濃いコーヒーは苦手で、いつもインスタントコーヒーを買ってきては、紅茶のような薄さで飲むのがお決まりだ。それに猫舌なので、熱いコーヒーをすするように飲むのも得意じゃない。それでもお洒落なコーヒーカップを使いたいが為に、アイスコーヒーにしたりはしない。もっとも紅茶のように薄いアイスコーヒーなんてさすがの菜亜子もまずいと思っている。

　菜亜子は一通り朝食のメニューをシュミレーションすると、ヨッコラショと再びお婆ちゃんのような掛け声を出して裏庭から縁側に上がろうとした。と、その時、菜亜子の足元で猫が鳴いた。
「ナァ～♪」
「あ！となりのにゃあ介……」
　にゃあ介は猫のくせにニャ～♪　とはめったに鳴かない。特に菜亜子に人間言葉で話しかける時は、決まってナァ～♪　と言う。
　菜亜子は初め、自分の名前を気安く呼び捨てする人間は一体誰だ！？　と不愉快な気分に加え、姿が見えないので気持ち悪がっていた。それが人間じゃなくてお隣さんが飼っている猫のにゃあ介だと分かった時は驚いた。しかも菜亜子だけで周りには誰も人間が居ないことを確かめると、にゃあ介がいきなり人間言葉を喋りだしたのには、心臓が止まるかと思った。それが今じゃナァ～♪　と鳴けば、暗黙の了解で会話が始まる。

「なぁ、菜亜子。朝から、と言ってももう昼だけど、トーストが食べたいなんて珍しいじゃないか？」
「うん。でも、そう言うにゃあ介も話し掛けてくるなんて、珍しいじゃない？　最近ずっと見かけなかったけど」
「まぁね。お互い付き合いが長いし、これと言ったトピックスも無いだろ？」
「そうだねぇ～　ＯＬ止めて暫くはありったけの貯金を持って、ジプシー気取りで放浪しながら紀行文書きまくって売れっ子作家になるんだ！　なんて息巻いてたけど、一年で旅暮らしも飽きちゃったし……なんかさぁ～お腹減るのよね、歩き回ると。それで旅先で美味しい物を色々食べるじゃない？　すると太ってきちゃってさ。なんか歩くのがおっくうになっちゃった。なんて贅沢な話だわね」
「まぁね。ハングリー精神てやつがエネルギー源になって行動出来るってことじゃないか？　かく言うオレも人間だった頃は、汽車でよく一人旅に出かけたよ。窓を流れて行く景色に人恋しくなって、だれから構わず話しかけたりしてたけど……」
「へぇ～にゃあ介の人間時代かぁ～　汽車なんて言うと昭和だね」
「昭和だったのかなぁ～　何処かの田舎町を歩いてて、ふらりと入った喫茶店でトーストとコーヒーを頼んだんだ。そしたらトーストの上にたっぷりのマーマレードがのせてあって、困ったよ。我慢して食べたけど、甘くて苦くて、思わずコーヒーをカブッと飲んだら熱くて熱くて……　その頃からオレって猫舌だったんだな。ははは」
「ははは。じゃあ、猫舌のわたしも行く行くは猫かもね」
「猫は……ま、一度なってみるのもいいさ」
「ねぇ、よかったら一緒にトースト食べない？」
「……いいのか？」
「何、遠慮してるのよ。コーヒー薄いけど、熱くないから」
「じゃあ、お言葉に甘えて頂くかな」
「どうぞ！　上がって上がって……あ、ブルーベリーは平気？　少し甘いけど」
「うん。少しなら……」

　菜亜子がキッチンで陽気にトーストとコーヒーの準備をしているなんて、ホントに珍しい。低血圧の菜亜子は、夕方までは調子が出なくて、大抵ブスっとした顔付きでブランチを食べている。猫のにゃあ介も珍しく少し緊張気味で、居間のソファーに畏まって座り、菜亜子が来るのを大人しく待っている。
　しばらくすると、トーストとバターのいい匂いがにゃあ介の鼻をくすぐり、コーヒーの強すぎない香りがにゃあ介の記憶を徐々に人間に戻して行った。
『オレは……　オレはあの旅で本当は菜亜子に出逢ったんだ。あの喫茶店の隅っこでスケッチブックに向って何かを描いてるキミに。だけど、声を掛けられなかった。何でだっけ……？　あぁ

、思い出した。オレはその時すでに爺さんだったんだな。……皮肉だよな。肉体は老化しても人間、心ってやつは老化なんてしやぁ～しない。それにしても、まさかオレがいつの間にか菜亜子の隣家の飼い猫になってるなんて、因果な話だ。オレの執着心がオレをネコに変えたのか？　……ま、理由はなんだっていい。こうして時々菜亜子と会話をして過ごせるのが幸せだ……』

　菜亜子がキッチンから二人分のトーストとコーヒーを運んで居間のテーブルの上に置いた。居間には菜亜子が学生時代に旅先で描いた田舎町の風景画が飾られてある。その絵を懐かしそうにソファーから眺めていたにゃあ介に菜亜子が声を掛けた。

「お待たせ！　さぁ、食べましょうか」

「なぁ、菜亜子……　幸ってこんなカンジなんだな」

「こんなカンジ？」

「あぁ、こんなカンジだ……」

　三日後の夕方、珍しく隣家の奥さんが菜亜子の家のチャイムを鳴らした。
「ちょっと温泉旅行に行って来ましたのよ」
　そう言いながら渡されたお土産の菓子箱には【肉球饅頭】と書かれてあり、菜亜子は思わず声に出した。
「肉球饅頭？」
「えぇ、それ珍しいでしょ。初めて見たからどんなのかしらって、お宅の分も買ってみたの。いつもお留守番をさせてる、うちのにゃあ介のことも思い出して……あ、そうそう！　温泉から帰ってご飯時になってもうちのにゃあ介の姿が見えないと思ったら、庭でお宅の洗濯物に包まっていましたのよ。どうしてかしら……？　あ、タオル。にゃあ介の匂いが付いたから勝手に処分させて貰いましたわ。もう使えないでしょ？　それでまぁ代わりと言っては何ですけど、【肉球饅頭】召し上がって。ホホホ。では御免あそばせ。……あ、菜亜子ちゃん、お宅のご両親、未だ旅行中ですの？お兄さんも旅に出ていらっしゃるとか。まぁ～ご家族揃って旅好きですのね。菜亜子ちゃん、一人で大丈夫？うちのにゃあ介、番犬の代わりにもならないでしょうけど、お宅の庭が好きみたいだから使ってやってね。ホホホホホ。では改めて、御免あそばせ」
「ありがとうございます。ハハハハハ」

　隣家の奥さんてば、いつになく軽快に言いたいことを喋ったなぁ～と思いながら、奥さんがちゃんと自宅へ戻ったのを確かめた後、菜亜子は気になる【肉球饅頭】の箱を開けて、早速中身を確かめてみた。すると三色の可愛いらしい肉球を模した饅頭が九個並んでいるではないか。
「いやん、きゃわゆい♪」
　肉球好きの菜亜子の心を奪うには充分過ぎるくらい饅頭の肉球は可愛い。
「ふぅ～ん、三色って、何味と何味と何味かなぁ～？」
　ニコニコしながら菜亜子は先ず、薄緑色の肉球饅頭を手に取って匂いを嗅いでみた。すると予想通り抹茶味のようだ。次に、茶色の肉球饅頭を取って再び匂いを嗅ぐと、どうもチョコレート味のようだ。
「やった♪　小豆じゃなかった」
　最後、薄黄色の肉球饅頭を手に取ろうとした時、誤って菜亜子の手から饅頭が滑り落ちた。と同時に、それはコロンコロンと勢い良く縁側まで転がり、サッシのカラス戸にぶつかってやっと止まった。
「なぁ～にぃ～　この肉球ちゃんは生きてるじゃないのぉ～？　わたしに食べられるのが嫌なのかな？」
　そう言いながらニコニコ顔の菜亜子が、薄黄色の肉球饅頭を拾おうとしたその時、外で声がした。

「ナァ～♪」
「ん？　にゃあ介？　其処に居るの？」
　日もすっかり暮れて薄暗くなった庭をガラス越しに覗くと、其処にはにゃあ介がションボリと立っていた。菜亜子は急いでガラス戸を開け声を掛けた。
「どうしたの、にゃあ介？　こんなに遅く……入る？」
「いいのか？」
「いいに決まってるじゃない！入って入って。……あ、ねぇ、今さっきお宅のご主人様からコレ貰ったの。肉球饅頭だって。ホラ、可愛いでしょ！」
「……それ、オレから」
「え？」
「オレの土産。あの時、菜亜子に渡したかったんだけど。だけどオレ……」
「あの時？」
「うん。……オレが人間だった時、オレ、菜亜子に旅先の喫茶店で出逢って……その時、話し掛けたかったんだ。だけどオレ……ちょうど買ったばかりの肉球饅頭で切っ掛けを作ろうと思ったけど、饅頭なんて貰っても嬉しくないだろうなって……」
「え？　コレ……可愛くて好きだよ」
「そっか、じゃあよかった。……じゃあ、オレそろそろ行くから」
「え？　もう帰っちゃうの？　一緒に肉球饅頭食べない？　コーヒー入れようか？」
「あ、いや。今夜はもう遅いし、遠慮しとくよ。夜一人で物騒だから気をつけろよ。菜亜子……ありがとな」
「ん？　うん。またね」
「ああ、またな！　あ、それ、柚子味だから」

　その後一週間、菜亜子はにゃあ介の姿を見なかった。一ヶ月後、隣家の奥さんが菜亜子ににゃあ介の消息を尋ねてきたが、菜亜子もずっと見かけていなかった。さすがに心配した隣家の家族が、にゃあ介の捜索願いのチラシを配って探し回った。しかし半年経っても消息は不明のままだった。
　そして一年後の朝。未だベッドで寝ていた菜亜子の左の耳元で声がした。
「ナア～♪　菜亜子、色々とありがとな。じゃあまたな」
　菜亜子はその言葉を聞いた瞬間、にゃあ介が天国へ帰って行ったのだ、と思った。今日はあの日と同じ梅雨の晴れ間。三日分の洗濯をしてやっとこせ干し終わると、十一時を告げる鳩時計の音がした。
「にゃあ介……」
　菜亜子がふと空を見上げると、肉球そっくりの雲が三つ、並んで浮かんでいた。　了